銭形平次捕物控

鉄砲汁

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、近頃金の要るやうなことはありませんか」

押詰つたある日、錢形平次のところへノツソリとやつて來たガラツ八の八五郎が、いきなり長い顎を撫でながら、こんなことを言ふのです。

「何だと？　八」

平次は自分の耳を疑ふやうな調子で、長火鉢に埋めた顔をあげました。

「ヘツ〳〵、ヘツ〳〵、さう改まつて訊かれると極りが惡いが、實はね、親分。思ひも寄らぬ大金が轉がり込んだんで」

「大きな事を言やがる。お上の御用を承はる者が、手弄などしちやならねえと、あれほどやかましく言つて居るぢやないか」

「博奕なんかで儲けた金ぢやありませんよ、飛んでもない」

ガラツ八は唇を尖らせて、大きく手を振りました。

「それぢや、富籤か、無盡か、――まさか拾つたんぢやあるまいな」

「そんな氣のきかない金ぢやありませんよ、全く商法で儲けたんで」

「何？　商法？　手前がかい」

「馬鹿にしちやいけません、かう見えても算盤の方は大したもので。ね、親分、安い地所でもありませんか、少し買つて置いてもいゝが――」

「馬鹿野郎、二朱や一分で江戸の地所が買へると思つてゐるのか」

「二朱や一分なら、わざ〳〵親分の耳には入れませんよ。大晦日が近いから、少しは親分も喜ばしてやりてえ――と」

「何だと？」

「怒つちやいけませんよ、ね、親分。錢形の親分は交りつけのねえ江戸つ子だ。不斷は滅法威勢がいゝが、宵越の錢を待ちつけねえ氣前だから、暮が近くなると、カラだらしがねえ。さぞ今頃は青息吐息で――」

「止さねえか、八。言ひ當てられて向つ腹を立てるわけぢやねえが、人の面をマジマジと見乍ら、何てエ言ひ草だ」

平次も呆氣に取られて、腹を立てる張合ひもありません。それほど、ガラツ八の調子は、ヌケヌケとして居りました。

「箱根ぢや穴のあいたのを用立てたが、今日のはピカリと來ますぜ。親分、此通り」

さう言ひ乍らガラツ八は、内懷から拔いた野暮な財布を逆にしごくと、中からゾロリと出たのは、小判が七八枚に、小粒、青錢取交ぜて一と掴みほど。

「野郎、何處からこれを持つて來やがつた」

平次は矢庭に中腰になると、長火鉢越しに、ガラツ八の胸倉をギユーツと押へたのです。

「あ、親分、苦しい。手荒なことをしちやいけねえ」

「何をツ、此野郎ツ。何處で盜んで來やがつた、眞つ直ぐ白狀しやがれツ」

平次の拳には、半分冗談にしても、グイグイと力が入ります。

「盜んだは情けねえ、親分、こいつは間違ひもなく商法で儲けた金ですよ」

ガラツ八は大袈裟に後手を突いて、斯う辯解を續けました。

「岡つ引に商法があつてたまるものか。盜んだんでなきや、何處から持つて來た。さア言へツ」

「言ふよ、言ひますよ、——言はなくて何うするものですか、——おう痛てえ、喉佛がピリピリするぢやありませんか」

「喉佛の二つや三つローズにしたつて構ふことはねえ。さア言へ」

「驚いたなア、持ちつけねえ金を持つと、喉佛に祟るとは知らなかつたよ」

「無駄はもう澤山だ。金を何處から出した、それを早くブチまけてしまへ」

平次が躍起となるのも無理のないことでした。正直と馬鹿力を取得のガラツ八が、萬々一、その頃の岡つ引の習慣に引摺り込まれて、うつかり役得でも稼ぐ氣になつたら、貧乏と片意地を賣物にして來た、平次の顏は一ぺんに潰れることでせう。

「親分、心配するのも無理はねえが、これは筋の惡い金ぢやありません。實は親分も知つて居なさるあつしの赤鰯を、望み手があつて賣つたんで」

「何？　手前の脇差を賣つた？」

「ヘエ――去年の暮、柳原の古道具屋を冷かし損ねて買つた、あの脇差が、十兩になるとは思はなかつたでせう」

ガラツ八の鼻は蠢めせます。

「手前が二分で買つて、ひどく腐つて居たあの脇差が、十兩になつたといふのか」

「その通りですよ、親分。あの脇差を見た人があつて、恐ろしく錆びて居る上に無銘だが、彦四郎貞宗に間違ひはない、若し間違ひだつたら、俺の損といふことにして、現金十兩で買ふがどうだ、といふ話でさ」

「フーム」

「本當に貞宗だつた日にや、十兩で賣つちや大變に損だから、一日待つて貰つて、知り合ひの刀屋を二三軒當つて見ると、――飛んでもない、そいつは備前物で、彦四郎でも藤四郎でもある筈はねえ。その上日本一の大なまくらだから、鍋の尻を引つ掻くより外に役に立たない代物だ。望み手があるなら、拵へごと一兩で賣つても大儲けだ――と言ふんで、思ひ切つて手離しましたよ、親分」

「呆れ返つた野郎だ。手前はその刀屋の鑑定を、相手に言はなかつたのか」

「言ひましたよ。念入りに輪をかけて言つてやつたが、相手は少しも驚かねえ――彦四郎貞宗でなきや、師匠の五郎入道正宗だらう。折角見込んだ品だから十兩が二十兩でも買つて置きて

えと斯うだ」

「――」

「ね、親分。こんな正直な商法はないでせう」

「――」

「生れて初めて入つた十兩の金だ。一人で費つちや冥利が悪いから、取あへず親分に見て貰ふつもりで持つて來ましたよ。ね、何んか斯う役に立てるやうな口はありませんか、親分、差當り拂ふ當がなかつたら、地所を買ふとか、家を建てるとか――」

ガラツ八は悉くいゝ心持でした。七八枚の小判を疊の上へ並べたり、重ねたり、チヤリンと叩いて見たりするのです。

「止してくれ、俺はその音を聞くと蟲が起きるよ」

「ヘツ、負惜みが強いね、親分」

「馬鹿な野郎だ。八兩や十兩で、江戸の眞ん中に家が建つ氣で居やがる」

「家なんか建たなくたつて構やしませんよ。これ丈けありや大福餅を買つても、隨分出がありますぜ」

「呆れて物が言へねえ、――だがな、八。見す〳〵大ナマクラと知つて、手前の脇差を十兩で買ふのは少し變ぢやないか」

「變ぢやありませんよ。氣に入りや、跛馬だつて買ひますよ」

「待つてくれ、――こいつは少し臭いぞ」

錢形平次はもう一度長火鉢に顏を埋めました。暮のやり繰と違つて、こいつは何うやら思案の仕甲斐がありさうです。それを眞似するともなく、八五郎も高々と腕を拱きました。

疊の上に並べた七八枚の小判も、何となく引込みのつかない姿です。

二

「八、近頃何か變なことがありやしなかつたか」

平次は改めてかう訊きました。

「變な事？」

「例へば、手前が嗅ぎ出した犯人とか、腑に落ちないと思つた事とか――」

「ありませんよ」

「何かの證據を握るとか――」

「なんにも握りやしませんよ」

ガラツ八はあまりにも屈託のない顏です。

「そんな筈はないが、――待てよ、その、手前から脇差を買つたのは誰だい」

「濱町の吉三郎、――遊び人で」

「吉三郎なら知つてゐる。賭事もしない様子だが、妙に金廻りのいゝ野郎だ、——その吉三郎と何處で知合になつた」

「髪結床で、——あつしと丁度互先といふ碁ですよ」

「手前、濱町まで顔を剃りに行くのかい」

「いえ、吉三郎の野郎が町内の錺床まで來るんで、——あすこの親方の剃刀がたまらねえつて」

「錺床の親方は、髷はうまいが、剃刀は下手ぢやないか」

「あつしもさう思ふんですがね」

「ところで、吉三郎は、何か手前に頼みはしなかつたか」

「いゝえ」

「少し變だな、八。脇差を賣つた時、何か言つた筈だと思ふが——」

平次の問ひは次第に核心に觸れて行きます。

「言ひましたよ、あつしの煙草入れの根附を見て、そいつは氣に入つたから、脇差と一緒に譲つてくれ——一つて」

「あの牙彫の——」

「どうせ濱町河岸で拾つた品だから、脇差へおまけにつけましたよ」

「濱町で拾つた？」

「ヘエ――」

ガラツ八の話は少し變つて居ります。――『一と月ばかり前、夜釣に行つた歸り、白々明けの濱町河岸に船を着けたことがありました。その時自分の船より一と足先に岸へ漕ぎ寄せた傳馬が、炭俵と米俵を二十五六俵陸へ揚げて、サツサと大川を漕ぎ戻つたのを見てゐると、足元の石垣の上に、牙彫の圓いものが一つ、危ふく水に落ちさうに引つ掛つて居た』――といふのです。

拾つて見ると、丁度手頃な根附で、眞中に穴まであいて居りますが、彫刻は怪奇を極めて、唐草模樣と鬼のやうな縮つ毛の人間の首と、それから得體の知れない髯文字がベタ一面に彫つてあつたのを、暢氣なガラツ八は、自分の煙草入れに附けて、そのまゝ腰に挾んで歩いて居たのでした。

「何だ、拾つたものをそのまゝ腰へブラ下げて居たのかい」

平次も少し呆れましたが、今に始めぬガラツ八の暢氣さが、腹を立てるにしても、少し馬鹿馬鹿しかつたのです。

「どうせ馬の骨か牛の骨に細工をしたものですよ。吉三郎は三拜九拜して持つて行つたが、あんなものが何かになりますか、親分」

「呆れた野郎だ」

平次は誰へともなく斯う言ひました。

「こんな事が商法になるなら、江戸中の古道具屋を漁つて、安物の脇差をうんと買ひ集めようかと思ふが、どんなもので」

「いゝ加減にしないか、八。吉三郎の狙つたのは、赤鰯ぢやなくて牙彫の根附だつたかも知れないな――兎に角、十両の金を持つて行つて、脇差と根附けを買ひ戻して來るがいゝ」

「三日も前のことですよ、親分」

「三日前だつて、三年前だつていゝぢやないか」

「十両の金が、三日もあつしの手に無事で居るわけはないぢやありませんか」

「仕様のねえ野郎だ、いくら費つたんだ」

「店賃と米屋酒屋の拂ひと、煙草を一つと大福餅を十六文買つて、一両二分と六十八文」

「いやに刻みやがつたな、――お靜、一両二分と六十八文、お前のところにないか」

平次はお勝手の方へ聲を掛けます。

「お前さん、――そんな事を言つたつて」

お靜の聲は口の中に消えました。差迫る大晦日を控へて此處も大世話場の眞最中だつたのです。

「氣のきかねえ事を言ふな、何のために質屋が暖簾を掛けて置くんだ。俺の着替をそつくり持つて行きや――」

「でも、あと三日で年始廻りぢやありませんか」

「この正月は風邪を引くことにするよ」
「――」
お靜は默つて出て行つた樣子でした。
「濟まねえ、親分」
ガラツ八は萎れ返つて、平手で額を叩いて居ります。
「こいつは罠だつたのさ、八。これからも氣をつけることだ、――なアに、お靜のことなんか心配することがあるものか、こちとらの女房は、貧乏や十手には馴れつこだよ」
平次はさう言つてカラカラと笑ふのでした。

三

「た、大變だ、親分」
「又大變の大安賣が來やがつた、――何だい、八」
十兩に纏めた金を握つて、濱町の吉三郎のところへ驅けて行つた筈の八五郎が、半刻も經たないうちに、面喰つた旋風のやうに舞ひ戻つて來たのでした。
「こいつは驚くぜ、親分。吉三郎が昨夜死んだんで」
「何？」

平次もさすがに立ち上がりました。

「下手人は鐵砲汁さ」

「河豚の毒にやられたのか」

大きな失望が、平次の顔をサツと翳らせます。

「友達が三人で河豚鍋を突つき乍ら、一杯やらかしてゐるまではよかつたが、その晩吉三郎が毒に中つて、七轉八倒の苦しみ、夜明け前に息を引取つたといふことですよ」

「あとの二人は何うした」

「無事だつたさうで」

「誰と誰だ」

「そいつは聞かなかつた」

「行つてみよう、八。どうも俺には腑に落ちない事だらけだ」

平時は帶を締め直して、草履を突つかけました。

「河豚で死んだと解つても——ですかい、親分」

「河豚だつていろ〳〵あるよ。後學のためだ、一緒に來るがいゝ」

二人はそのまゝ、濱町の吉三郎の家へ飛んだことは言ふ迄もありません。

吉三郎の派手な生活に似ず、家は至つて地味で、贅澤ではあるが、何となく粋好みでした。

附合ひがあまりなかつたものか、集まつて居るのは、ほんの近所の人達が二三人。それも平次

とガラツ八の姿を見ると、妙に掛り合ひを惧れるやうに、コソコソと姿を隠してしまひます。

「飛んだことだつたな、お神さん」

「ま、錢形の親分さん。飛んだことになつてしまひました」

女房のお由。二十五六の良い年増が、顔を擧げることさへ出來ない樣子で、逆さ屏風の中に泣き崩れて居るのでした。

「昨夜の客は誰と誰だい」

平次は形ばかりの線香をあげてから、かう靜かに訊きました。

「それが、よく、わかりません」

「はて？」

「ちよい〳〵見かけるお顏ですが――」

「年の頃は」

「二十七八と五十二三」

「河豚は何處から買つたんだ」

「年を取つた方のお客が持つて來ました。竹の皮包みにして、――今日漁つたばかりのを、知合からわけて貰つて來たが、よく洗つてあるから大丈夫だ――と言つて」

「確かに三人で食つたのだね」

「それはもう間違ひもありません、大層おいしいから、私にも是非とすゝめましたが、私は河

豚と雲丹は我慢にもいけません」
「二人の客が歸つてから、毒が利き始めたのか」
「え」
「河豚の殘りがあるだらう、生でも煮たのでも構はねえ、チヨイと見せて貰はうか」
平次は妙に執拗に突つ込みます。
「それが、その殘つたのを、皆んな竹の皮に包んで持つて行つてしまひました」
「吉三郎は河豚をちよい〳〵やるのかい」
「いえ、生れて初めてださうで、ひどく嫌がつて居りましたが、二人に笑はれて我慢に食べたやうです。でも、一と箸二た箸食ひ始めると、——こりや飛んだうまいや、鮟鱇そつくりだ——そんな事を言つてました」
「鮟鱇そつくりと言つたのかい」
「それから酒の味がどうも變だ、舌のせゐかしらとも言つてゐました」
女房のお由は進まない樣子乍ら、問はるゝまゝに説明しました。
「三人で一つ鍋を突ついたのだらうな」
「え、それなのに、中つたのが一人は情けないぢやありませんか」
「二人が無事とどうしてわかつた」
「何處で噂を聞いたか、今朝お二人はあわてて飛んで來ました。御近所の衆も御存じですが、

何か宿が預かつたものがあるとか言つて、佛樣の懷までかき廻して行きましたが。――」
「それが見付かつたのかい」
「そこまでは解りません」
話が次第にこんがらかつて、そして微妙になつて行きます。
「おや？　この脇差ですよ、親分」
ガラツ八は死骸の枕元に置いてあつた、魔除けの脇差を取上げました。言ふまでもなく三日前にガラツ八が吉三郎に賣つた、十兩の赤鰯丸です。
「そいつには大した用事がなかつたんだよ。ところでお神さん、毒は何刻ほど經つて利き始めたんだ」
「鍋が空になると、二人のお客はすぐ歸りました。それを送つて出ると、上り框で引ツくり返つた切り――」
「矢張り身體が痺れたんだね」
お由の聲が涙に途切れるのを、平次は慰め顏に言ふのでした。
「いえ、痺れもどうもしません。急に腹の中へ火が付いたやうだと言つて、目も當てられない苦しみをしましたが、到頭黒血を吐いて夜明け前に息を引取りました」
「醫者は？」
「町内の玄道さんに診てもらひましたが、何の役にも立ちません」

お由はこれだけ言ふのが精一杯でした。平次の問ひが途切れると、吉三郎の死骸に獅噛みつくやうに、時々は聲を立てて泣いて居ります。

四

「親分、河豚汁ぢや十手捕繩にも及ばないぢやありませんか」

吉三郎の家を出ると、ガラツ八はもう天下泰平の顏になつてゐるのでした。

「手前はさう思ふのか」

「だつて親分」

「だから幾年經つても、大物は擧がらねえのさ」

錢形平次は八五郎の鈍骨を殴むともなく、かう言ふのでした。

「ヘエ――、すると、何か變なことでもあるんで？」

「其邊に居る町内の人達に、今朝吉三郎の家へ來た、二人連れの人相を訊くがいゝ。その邊が手繰りどころだ」

「ヘエ――」

ガラツ八は吉三郎の家の裏口へ廻りましたが、やがて、狐につまゝれたやうな顏をして戻つて來ました。

「どうした、八？」

「變ですぜ、親分。今朝此處へやつて來て、佛樣の懷までかき廻して行つたのは、三十前後の凄い年增と、四十恰好の浪人者らしい男ださうですよ」

「それ見るがいゝ」

「吉三郎夫妻とは餘つ程昵懇の樣子で、時々此家へ來るさうですよ」

「所、名前は？」

「そいつは解らねえ、——お由を締め上げてみませうか」

「無駄だよ、止すがいゝ。それに亭主の死骸の側で手荒なことをしちや、いかに御用でも寢醒めがよくねえ」

「親分は相變らず弱氣だ」

「それでいゝのさ、氣が強くて考へが淺かつた日にや、岡つ引は罪ばかり作るよ」

平次はそんな事を言ひ乍ら、町内の本道、町野玄道を訪ねました。

吉三郎毒死の顚末を細々と訊くと、

「親分、あれはどうも腑に落ちないよ、河豚の毒ばかりではなかつたやうだ」

「すると、何か外の毒でも盛られた樣子で？」

「いや、さう言ふわけぢやない。第一あんな激しい毒藥は、江戸中の生藥屋を搜したつてない——南蠻物なら知らないが——」

「南蠻物？」

「矢張り河豚にして置く外はあるまい。三人で食つて一人しか中らないといふのは、河豚の外にはないことだ。鍋の中に外の毒が入つてゐたなら、三人が三人ともやられる筈だ」

玄道は大きな坊主頭を振るばかりです。

平次とガラツ八はもう一度吉三郎の家へ戻りました。が、お由はもう白い眼を見せるだけで、二人の問ひにもろくに答へてはくれず、親類縁者も、友達もない様子で、話を手ぐり出す工夫もありません。

「お神さん、もう一つ二つ訊きたいが、お前さんところの宗旨は何だえ」

平次はつかぬ事をきくのでした。

「門徒ですよ、今お寺様が來ますから、お宗旨の事ならそつちへ訊いて下さい」

少し劍もほろゝです。

「江戸には親類もないんだね」

「あつたつて遠い身寄は音信不通で、附合つちやくれません。尤も長崎には亭主の弟が居ますが、お葬式に間に合ふわけはなし」

「そいつは氣の毒だ」

そんな事を言ひ乍ら、家の中を念入りに見ましたが、ひどく裕福らしいといふ外には、何の變つたところもなかつたのです。

「吉三郎は遊び人で通つてゐたが、勝負事は好きぢやなかつたさうだ。立入つたことを訊くが、世過ぎは何でやつて居たんだ」

平次の問ひはかなり突つ込みます。が、

「私にも解りませんよ。金の成る木でも持つて居たんでせう」

お由は空嘯いて相手にしさうもありません。

「もう一つ、三日前に八五郎が、この脇差と牙彫の根附を一つ、十兩で吉三郎に賣つたさうだ。少しわけがあつて、それを返して貰ひたいんだが」

平次は十兩の金をお由の前に押しやつて、相手の出やうを待ちました。

「勝手にその脇差を持つて行つて下さい。尤も牙彫の根附なんかは知りませんよ」

「確かに持つてゐた筈だが――」

「親分も、佛樣の懷が見たいんでせう。勝手にするがいゝ、馬鹿々々しい」

お由は氣が立つて居るらしく、かう言つてプイと座を立ちました。

「見ませうか、親分」

立ちかゝる八五郎。

「無駄だらう、今朝拔かれてしまつたよ、――赤鰯丸なんか持つて行つても仕樣があるまい、――十兩の金さへ返しや氣が濟む。さア歸らうか、八」

平次はもう何の未練氣もなく立ち上がるのでした。

五

その日半日、平次は何處ともなく飛んで行つてしまひました。ガラツ八は吉三郎の家を宵まで見張りましたが、町内の百萬遍の講中が來たのと、お通夜の小坊主が、お義理だけの經をあげた外には、何の變りもありません。

フラリと平次の家へ來たのは亥刻少し過ぎ、食はず飲まずで見張つてゐてひどく疲れて居ります。

「親分は？」

「まだ戻りませんよ。入つて待つてゐて下さいな、八さん」

お靜の蟠りない調子に、八五郎はいつものやうにヌツと入つて長火鉢の前に頬杖を突きました。

「何處へ廻つたらうなア」

「お支度は、八さん」

お靜はそれに構はず、腹の減つてゐるらしい八五郎の顏を、少し遠くから鑑定して居ります。

「親分が歸つてから御馳走になりませう」

ガラツ八にも矢張り遠慮はあつたのです。

「それぢや、せめて一本燗けませう」
「ヘエ、――變なことがあつたもので――」
「まア、八さん、たまにはお酒位はありますよ。――ツイ先刻、八丁堀の旦那から、心祝ひがあるからと、わざ〳〵一升届けて下さいましたよ」
「そいつは豪儀だ、――さすがに笹野の旦那は氣が付くぜ、ヘツ、ヘツ」
八五郎はすつかり相好を崩してしまひます。
お靜はその間に、銅壺に突つ込んだ徳利を拭いて、八五郎の前に据ゑた膳の上へ、そつと載せてやりました。元は水茶屋に奉公してゐたお靜ですが、さすがに夫の留守に、子分の酒の酌までしてやるのを憚かつたのでせう。
「濟みません」
「なアに、此方が勝手なんで、有難てえな。ト、ト、ト、散ります散りますと來やがる。ヘツ、ヘツ、良い色をしてゐるぜ」
グツと喉を鳴らし乍ら、猪口の手を胸のあたりまで持つて行つた八五郎。
「待ちな、八」
ガラリと格子が開きました。錢形平次が歸つて來たのです。盃を膳へ置くかと思つた八五郎の手は、意地汚くそのまゝ唇へ――
「あツ」

八五郎の手をハタと打つたものがあります。盃は後ろに飛んで、パツと胸から膝へ飛散る酒。平次の煙草入が飛んで來たのでした。

「親分」

八五郎の聲にも怒があります。

「馬鹿ツ、そいつを呑むと命がねえぞ」

「えツ」

「今路地の外まで歸つて來ると、變な野郎がウワウロして居るから、樣子を見てゐるうちに、お靜の話を聞いてしまつたよ、——八丁堀の旦那が、心祝ひに酒を下すつたなんて、そいつは大嘘だ。俺はつい先刻まで、八丁堀に居たんだから、お酒を下さるなら、そんなお話の出ないわけはねえ。心祝ひどころか、笹野の旦那は明日は先代樣の法要で、牛込のお寺まで行かなきやならないと言つて居なすつたよ」

さう言ひ乍ら平次は、埃も叩かずに入り込んで、默つたまゝお靜の差出す樽を受取つて眺めました。

「親分、そ、そいつは本當ですかえ」

「嘘だつた日にや、俺は八に申譯がねえことになる。これを見るがいゝ、樽は町内の酒屋のだ。八丁堀から屆いたのではない證據は、この※定の印で判るだらう」

「——」

八五郎もさう言はれると、口もきけません。

「危いところだ、八。そいつを一と猪口呑んだだけで、手前は俺の身代りに、血へどを吐いて死ぬところよ」

「――」

「だが、癪にさはる野郎ぢやないか。この平次を鰌と間違へやがつて」

「誰がこんな事をしたんで、親分」

八五郎は漸く人心地がつきました。

「吉三郎を殺した奴だよ」

「ぢや河豚？」

「馬鹿、河豚が酒を買つて、届けるかよ」

「さア解らねえ」

「俺も解らねえが、こいつは大變な曲者だ。退治しなきや御府内の難儀、お上の御威光にも拘はる。來い、八。今晩のうちに埒をあけてやる」

「ヘエ――」

八五郎は平次の劍幕に釣られて、モソモソ立上がりました。

「お靜、その酒は匂ひを嗅いでもならねえよ。封印をして大事にしまつて置け」

「ハイ」

言ひ捨てた平次。其足で驅け付けたのは、町内の酒屋升定でした。番頭に訊くと、

「いゝ年増でしたよ。一番良いのを一升量らせて、小僧に持たせてやりませうと言ふと、イヤ、それには及ばない、私が持つて行かなきや、親切が屆かないつて」

「その女は三十前後の――」

「大店の御新造といつた風でした。頭巾を冠つて居るので、髪形はわかりませんが」

「有難う、飛んだ手數だつた」

平次は外へ出ると、眞つ暗な師走の空を仰いで、大きく息をしました。見えざる敵のしたゝかさを改めて犇々と感じた樣子です。

六

「お神さん、そいつは間違ひだぜ。吉三郎は河豚で死んだんぢやねえ、立派に毒害されたんだ」

通夜の人數を追つ拂つて、八五郎に見張らせた平次は、吉三郎の死骸を中に、お由と膝詰め談判を始めたのでした。

「まさか、親分」

お由は容易に信じさうもありません。

「證據はいくらでもある。第一、昨夜三人で食つたのは、河豚ぢやない鮫鰊鍋だ、吉三郎が河

豚を食つたことがないと言ふから、鮟鱇を持つて來て、河豚といふことにして食はせたんだ。鮟鱇鍋で死ぬ氣遣ひはないが、河豚なら隨分三人のうち一人死ぬといふことがないではない――、彼奴等は其處を狙つたんだ」

「――」

「殘つた魚を竹の皮包にして持つて歸つたのは、後で鮟鱇と判つては面白くないからだ。それから、河豚の毒なら身體が痺れる筈だが、そんな事がなくて、腹の中が燒け爛れるやうで、血を吐いたのは南蠻渡りの毒藥に違ひない。玄道さんもさう言つて居る」

「――」

「毒は、吉三郎の盃の中に入つて居たんだ。多分、ちよいと立つた時か何か、投げ込まれたんだらう。――その證據は、昨夜は三人共、盃のやり取りはしなかつた筈だ」

「えツ、そ、その通りですよ。親分。いつも差したり差されたりするのが、昨夜は最初から御家人喜六の言ひ出しで、盃のやり取りなし、うんと食つて飮まうといふことにしたやうでした」

「それ見るがいゝ。お前の配偶は、その御家人喜六と、もう一人の年增に殺されたんだ。今夜は俺のところへまで毒酒を持込みやがつたよ。放つて置くと何をやり出すか解らない」

「えツ」

「解つたか、お神さん。夫の敵を討つ氣はないのか」

「畜生ツ、さうとは知らずに、――私は亭主に口止めされたのを守つて、今まであの二人を庇

つてばかり居ました、——敵を討つて下さい。親分さん」
お由にも、漸く事件の全貌が解つた様子です。
「それにしても相手の素姓が解らなくちや、敵の討ちやうがない。あの女は何だい」
「唐人お勇といふ大變な女ですよ」
「三人で何かやつて居た筈だが——」
「何か大仕事をしてゐるやうでしたが、私には言つてくれません」
お由は全く何にも知らない様子でした。
「仲間はたつた三人切りか」
「子分は二三十人ある筈です」
「ね、お神さん。佛樣のことを惡く言ふわけぢやないが、吉三郎はその御家人喜六と唐人お勇に荷擔して大層なことをやつて居たんだ」
「——」
「俺の見當では、多分拔荷を扱つて居たのだと思ふ、——拔荷といふと何でもないやうだが、こいつは大變な御法度で、露顯すると獄門にも磔刑にもなる」
「——」
「自分の榮華のために、紅毛人に御國の寶をやつて、厄體もない贅澤な品物を買入れ、それを三倍五倍の利潤で、金持や物好きな人間に賣り付けるのだから、拔荷扱ひは商人の風上にも置

けねえ、屑のやうな人間だ」

「――」

「お國の寶の大判小判、あれを紅毛人は命がけで欲しがるさうだ。だから、命知らずの紅毛人は、羅紗だの、ビードロだの、いろ〳〵の小間物だの、あまり生活の足しにならぬ物を持込んで、この國の大判小判と換へて行くのだ。長崎ではお役人の目がやかましいから、九州の沖で日本の船に積換へ、米や炭の荷に交ぜて、公方様お膝元へ持つて來るに違ひない。江戸へは諸國の荷が集まるから却つてわからない道理だ、――現にお前の夫の吉三郎を殺したのも、その抜荷で入つた南蠻祕法の毒藥だ」

平次の舌は焔のやうに燃えます。

「親分さん」

「私慾のために掟を破り、その上、人まで殺すやうな惡者は放つては置けない。お前の知つてることがあつたら皆な言つてくれ、許して置けない奴等だ」

「親分さん、皆んな申上げます」

「それは良い心掛だ。夫の罪亡ぼしにもなるだらう」

「私は何んにも知りません、――でも、船の入る時の合圖だけは知つてゐます。――時々見張りをさせられましたから」

「有難い、それが解りや」

「――」

お由は聲を潜めました。

七

その晩神田の平次の家は燒けたのです。

そればかりは、錢形平次も氣が付かなかつたのでせう。毒酒の計略は見事に見破りましたが、それだけで油斷をしてゐると、その夜の丑刻半頃、三方からあがつた火の手は、瞬く間に平次の長屋を燒き落し、近所の二三軒を半燒にして、漸く納まつたのでした。

風がないのと、暮の街で注意が行屆いたので、これ丈けで濟んだのは不幸中の幸ひでしたが、困つたことは、肝腎の錢形平次が、それつ切り行方不知になつてしまつたことです。

――錢形の親分が燒け死んだとよ――

――表裏の戸口は外から閉めてあつたさうだ、お靜さんが命から〳〵逃げ出したといふぜ――

そんな噂が八方から飛びました。全く、燒跡にシヨンボリと立つてゐる、氣の拔けたやうなガラツ八の姿や、顏から腕へかけて、晒木綿で卷かれた、痛々しいお靜の樣子を見ると、錢形平次が死んだといふのも、滿更の噂ばかりではない樣子です。

晝頃には八丁堀の與力笹野新三郎も來ました。江戸中の顏の良い御用聞も、五人十人と集まつて來て、夕方には、それが二三十人になり、打ち濕つた樣子で、ポツポと烟る灰を掻かせて居ります。

日が暮れると、平次の遺骸を板圍ひの中から運び出し戸板に載せて、回向院に移しました。江戸中の名ある御用聞手先が二三十人、笹野新三郎と一緒に、それに從つたことは言ふ迄もありません。

その晩の戌刻半頃、この一行は回向院の寺内に入り、其處でお通夜が營まれたのです。

同じ夜、子刻過ぎ、永代のあたりから漕ぎ上がつた傳馬が一艘、濱町河岸に來ると、船頭が舳の灯を外して、十文字に二度、三度と振りました。

師走二十九日、漆のやうな闇の中に、その光が水を渡つて走ると、何處からともなく河岸に集まつた人數がざつと二十人ばかり。

「變な時船が入つたものだね、お首領」

「宵のうちに、永代から合圖があつてびつくりしたよ、——今頃入る船はない筈だが、春になつてから來るといふのが、何かの都合で早く入つたんだらう」

さう言つた囁きが、彼方、此方に交されます。

「それよ、板を渡してくれ」

「おい」
「酒の荷が先か米の荷が先か」
「明日は大晦日だ、酒の荷を先にしてくれ。三河屋も、長崎屋も來て居るぞ」
何時の間にやら、屋號を入れた提灯が二つ三つ用意されました。屈強な若者達が、船から運び出す荷を、陸に待つて居る人足が、言葉少なに受取つて、何處ともなく姿を消します。
船の中の荷物はザツと二十七八。その全部を運び終ると、後に殘つたのは、頭巾を目深に冠つた男と女の二人でした。
「これでよし、歸らうか」
「歸りませう」
歩みを移す二人の前へ――、
「御用ツ」
ヌツと突つ立つたのは八五郎のガラツ八です。
「何?」
「御家人喜六、唐人お勇、神妙にせい」
パツと組付いて行くガラツ八、お勇は身をかはして、トンと肩のあたりを突きました。
「ワツ」
二三歩泳いで立直るガラツ八。その後ろから、

「えいツ」

後家人喜六の一刀が闇を劈くのを、

「俺が相手だ、來いツ」

横合から飛込んだ十手が、ガツキと受止めました。

「邪魔だツ」

「抜荷の惡事、吉三郎殺しの下手人まで露顯をしたぞ。觀念せいツ」

「何をツ」

御家人喜六は、お勇を後に庇つて、一刀を闇に構へます。

「御用ツ、御用ツ」

八方から、ヒタヒタと詰めよる捕方の人數。

「えツ、寄るな〳〵、一人殘らず切つて捨てるぞツ」

御家人喜六の腕は拔群でした。

「傳馬は此方で仕立てた僞物だ、仲間は一人殘らず生捕られたぞ。神妙にお繩を頂戴せい」

先刻、船から揚げた荷物を、一つ〳〵擔いで行つた子分は、回向院に通夜をすると見せかけた、江戸中の手先に、一人殘らず後を跟けられ、落着く先で縛られたとは、御家人喜六もまだ知らなかつたでせう。

「えツ、其方共に縛られる喜六ではない、退け〳〵」

サツと身を飜すと、眼にも止まらぬ早業で、早くも二三人の捕方は淺傷を負はされた様子。

「油斷するなツ」

後ろから激勵の聲を掛けたのは笹野新三郎です。

「灯だツ」

誰やらの聲に應じて、何處に隱してあつたか、十幾つの御用の提灯が、一度にパツと二人の曲者を照します。

「あつしが行きませう。この野郎には家を燒かれた怨があります」

パツと飛出した美丈夫。

「平次だ、平次だ」

捕物陣は二つに割れて、その道を開きました。

「生きてゐたのか平次、命冥加な奴だ」

苦りする御家人喜六、右手の刃は、油斷なく灯にギラリとうねります。

「手前のすることは一々卑怯だ、我慢のならねえ野郎だ」

さう言ふ口を塞ぐやうに、喜六の刃はサツと伸びます。

「おつと危ねえ、——これでも食やがれ」

平次の右手が擧がると、夜風を剪つて錢が一枚、御家人喜六の唇へ——。

「己れツ」

僅かに刃の平で受けましたが、二枚目は強(したゝ)かに頬骨へ、三枚目は額へ、――眼へ――。

「野郎ツ」

ひるむ後ろから、無手(むず)とガラツ八が組付いて居たのです。

「危ねえ、八」

錢形平次は驚いて飛込みました。喜六の後に居る唐人お勇は、匕首(あひくち)を抜いて、ガラツ八の脇腹へサツと突いて出たのです。

平次は危ふくそれを突飛ばすと、お勇の匕首は飛龍(ひりう)の如く平次の胸へ飛んで來たのでした。それをかはして、

「女、いゝ加減にしろツ」

飛付く平次。その手を拂つてお勇の身體は、大川の寒水へ、水音高く飛込んでしまひました。

× × ×

「變な捕物だつたね、親分」

その歸り路、柳原土手でガラツ八は斯(か)う誘(さそ)ひかけました。

「脇差を十兩に賣つたのが始まりさ。手前(てめえ)が感のいゝ人間で、吉三郎の心持を讀むと、こいつは危ないことだつたよ」

平次は面白さうです。

「ヘエ――」

「まだ判らねえのか、——手前に抜荷を揚げる現場を見られたから、大なまくらを十両で買つてな、手前の御機嫌を取つたのさ、——見て見ぬ振りをしてくれといふ謎さ」

「なアーる」

「今頃感心する奴があるものか、十兩の元手を唯取られたやうなものだ」

「ヘエ——」

「あの牙彫の根附は、多令抜荷を受取る手形のやうなものだらう。吉三郎は仲間では三下だが、あの牙彫の手形を手前のところから見付けて持つて行くと、急に頭領の株を狙つて、抜荷の大儲けを一人占めにしようといふ大望を起したのさ」

「——」

「それと氣の付いた御家人喜六と唐人お勇が、吉三郎如きに大事の手形を取られちや叶はないから、鮫鰊を河豚と言つて食はせ、實は毒酒で殺して死骸から牙彫の手形を抜いたのだよ」

「さう繪解きをして貰ふと、さうでなかつたら嘘見たいで、ヘエ——」

ガラツ八はまだ長い顎を撫でて居ります。

「だが、自分達の利潤のために、お上の御法を破る奴は憎いね。その上仲間を殺したり、——俺の家まで燒いたり」

「さう言へば、親分は何處へ行きなさるつもりで——」

「お靜は當分里のお袋に預けたよ。——俺はな、八。當分、八五郎の家に居候ときめたよ」

「そいつは有難てえ。親分を居候に置いたとあれば、あつしも肩身が廣い」

「ハツハツハツ、ハツハツ」

柳原土手の夜は白みかけて居りました。大晦日（おほみそか）の江戸の街は、一瞬轉毎（しゆんてんごと）に、幾百人かづつ最後の足掻きの坩堝（るつぼ）の中に、眼を覺（さま）さして行くのでせう。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物全集第十三巻　焔の舞」同光社磯部書房
　　1953（昭和28）年9月5日発行
初出：「オール讀物」文藝春秋社
　　1938（昭和13）年12月号
※題名「銭形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2014年5月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

鉄砲汁

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/